第三百二十四話　二正面作戦：強要された日本と回避に藻掻く日本！

大東亜戦争は、大陸正面と太平洋正面という二正面作戦に直面し、厳しい戦争を強いられ、結果的に日本は敗戦に追い込まれた。支那事変を解決せずして対米英蘭戦を開始する愚については言うまでもない。日本の戦争指導者も二正面作戦の愚は回避したいと願い、そして藻掻きつつも、米英に強要されて二正面作戦に追い込まれたのである。一方、米国は意図的に日本二正面作戦を強いたのだ。

この日米の差は何だろう。何故こうなってしまったのか？日本（のトップリーダー）には何か絶対的な弱点があるのか？

１　日本の藻掻き

盧溝橋の一発（1937/7/7）に端を発した支那事変は、不拡大方針にも関わらず、中支そして支那全土へと拡大し、日本は泥沼にはまってしまった。日米戦が現実化する懸念が高まるにつれ、日本は支那問題の早期解決を願い、蒋政権に対する各種諜報・謀略・和平工作を展開し、親日政権の樹立、一撃和平論論等により打開を図ったのであるが、何れも奏功しなかった。対米英戦開始（1941/12/8）後も種々の和平工作や軍事作戦を行うも展望は開けなかった。これらの細部は、当メモランダム１０、２５，３６、５９、９２、１７９，１８５，１８８，２２２，２７０，２８０，３１４話を参照して貰いたい。

日本は、支那大陸からの航空攻撃を懸念し、大陸の航空基地攻撃を計画実施したが、その攻撃は戦争末期には大打撃を蒙むることとなった。老河口（湖北省）、芷江（湖南省）等攻撃作戦然り。こんな形で付けが返ってきたのだ。

２　米国（ＦＤＲ）の大戦略

米国は、「東亜新秩序建設」の近衛声明(1938/11/3)が発せられるや対日経済制裁に踏み切り、軍事作戦計画を策定し、更には日本の支那問題にも積極的に介入すると共に戦争準備を本格化させた。

チャーチルからの欧州参戦への矢の如き催促を受けたＦＤＲは、国内の８０％以上の戦争不介入の国内世論を無視も出来ず苦慮していた。一方、日米戦が惹起するとなれば、欧州戦と対日戦という二正面を強いられる可能性があり、戦争準備も完成していない状況では二正面作戦は何としても避けたいと願った。その為に、日本を大陸に拘束しておく必要があり、その最善の策は蒋介石政権に対するテコ入れだったのだ。

米国が主体的に行った対支援助は、日本爆撃のための基地建設、援蒋ルートによる援助（２０２話）、軍事援助（１０話）、国共合作容認、蒋介石のカイロ会談招致、その他１１話）等日本陸軍の大部隊を大陸に拘束し、日米交渉を引き延ばし（Baby）、米国の戦争準備の完成を急がせた。

３　支那問題を解決できずに藻掻く日本と、ほくそ笑むルーズベルトという構図が見事に出来上がり、日本はその思いにも関わらず二進も三進もいかなくなってしまったのである。

４　何が問題なのだろうか？

大戦略として二正面作戦の愚は当然承知していた筈だが、それでも、支那問題を大英断を奮って解決するという戦略判断が出来なかった。大決断して支那から撤退して日米戦に専念していたら戦局はかなり異なったものになった可能性があるのではと思わざるを得ない。日本の政・軍の指導者は目先の作戦をどうするかについては真剣に議論したが、大所高所からの議論は出来なかったと思われる。また議論は出来ても誰しもが決断できなかった可能性があり、決断してもそれを実行しうる胆力もなかったのではないかと考えざるを得ない。大戦略の構想力なき日本の悲しさはいまでも同じではないか。

（了）